

主イエスは、この世界の終わりを見据えながら、神の国の喜びについてお語り下しました。そこでは主なる神が、「一緒に喜んでくれ」と呼びかけ、喜びに招き入れて下さるのです。

日本語に、「タレント」という言葉があります。テレビやマスコミに登場する人のことですが、今日のこのたとえ話の「タラント」から来ています。聖書を知っている世界では、特別な才能は自分で獲得したものではなくて、神からのプレゼント、与えられた賜物だと考えます。

今日のたとえ話は、ある主人が、僕たち「それぞれの能力に応じて」5タラント、2タラント、1タラントの財産を預けて旅に出た、という話です。1タラントというのは、六千デナリオンで、労働者の20年分の賃金に相当すると言われます。主人は、とてつもない金額の財産を、自分の僕に預けて旅に出してしまったのです。僕たちは、それぞれの判断で、5タラント預けられた僕はさらに5タラントを、2タラント預けられた僕は2タラントをもうけました。ただ、1タラントを預けられた僕だけが恐れを抱き、地面に穴を掘ってそのお金を隠しておきました。

主人が帰ってきたのは、「だいぶ時がたってから」でした。いつ帰ってくるか分からない主人を待ちながら、僕たちは一日一日生きてのです。ある日突然、主人が帰って来て、すぐに「計算をはじめ」ました。ここで主人は、二人のもうけた僕に同じ言葉をかけました。「良い忠実な僕よ、よくやった。…主人と一緒に喜んでくれ」。

これはとても不思議な言葉です。5タラントも2タラントも決してわずかなお金ではありませんでした。旅に出た時に、このお金を元でにしっかりかせげと命じた訳でもありません。しかし主人は、「一緒に喜んでくれ」と言うのです。

通常の「たとえ話」というのは、難しい話を分かり易くするものです。ところが主イエスのたとえ話は、疑問が次々とわき上がるような話です。この主人の思いも、計算と評価の仕方も不思議です。主イエスのたとえ話は、私たちに考えさせます。天国についての私たちの想像や期待を砕いてしまうのです。

マタイによる福音書第20章の「ぶどう園のたとえ」を思い出します。天国は、ある主人が、ぶどう園で働く労働者を雇う話だというものです。朝早くから働いた者にも、午後遅く来て働いた者にも、この主人は同じ賃金を支払います。理由は単純で、「わたしがしたいようにする」というもの

です。本当に理不尽な話しです。私たちは、自分が差し出したものにふさわしく報われたいと思います。しかしこの主人は、自分がしたいように、約束通りに報酬を与えてしまいます。実は、何一つ差し出すことができず、全く役に立たない者に、それでも豊かに主人は報いてしまうのです。一緒に喜びのです。まず主人が喜び始めてしまっていて、その喜びの中に、僕たい、私たちを招き入れて下さるのです。

1タラントを託された者は、主人に喜んでもらいたいと思うことができませんでした。主人を恐れ、託されたお金は迷惑なものでした。主人との関係をまるでなかったかのように、目に見えない所に隠してしまいます。他の二人が、いつも主人のことを思い、主人の帰りを楽しみにしながら過ごしたのに対して、この人は、主人の帰りを恐れながら人生を生きました。

天の父は、私たちの能力をよくご存じです。そして私たちには分不相応な賜物をお委ね下さいます。それは終わりの日に、神ご自分が喜びためです。ただその日、その時を待ち望んで、一緒に喜びのために僕を信じ、賜物を託してその時を待ちわびて下さるのです。神の喜びがあふれ出る場所、それが天国なのです。

私たちは、もし神が来て、目を留め、語りかけ、招いて下さらなかつたら、何一つ持たず、飢え渴き、滅び去って行くほかない存在です。ただ、神の憐れみによって賜物を委ねられ、主人の到来を待つようにと招かれているのです。その日のために、父なる神は、ひとり子、主イエスを十字架に架けて、終わりの日の準備をして下さいました。やがて精算の時が来ます。終末です。その日、神は私たち一人一人を御前に呼び出し、名前を呼んで下さいます。そして、一緒に喜んでくれとおっしゃるのです。

これはすべて、神の御意志から起こった出来事です。ふさわしくない者を招き入れ、とうてい手にすることなどあり得ない永遠の命をお与え下さいました。神の国の常識は、私たちの非常識です。赦されざる者が赦され、受けることのあり得ない報酬が与えられてしまうのが神の国です。この恵みに感謝して、主を讃美いたしましょう。